第7回量子ソフトウェアハンズオン(産学協働ゼミ)

テンソルネットワークを用いた量子回路シミュレーション

東大理 大久保毅

目次

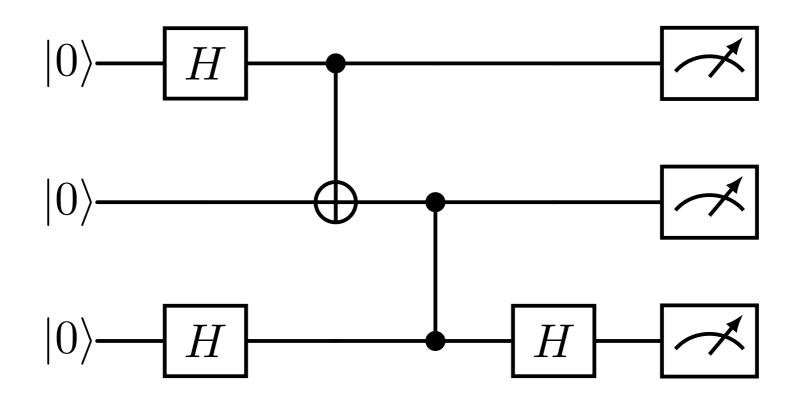
- ・ 量子計算の概要
 - ・ 量子回路の復習
 - ・ 演習で扱う量子アルゴリズム
- ・ テンソルネットワークによるシミュレーション
 - 量子回路とテンソルネットワーク
 - ・計算コストと縮約順序
 - ・ 多量子ビットゲートの行列積分解
 - ・量子状態のサンプリング

量子計算の概要:量子回路の復習

量子回路

量子回路:**量子ビット**に演算するゲート操作の設計図

- ・量子ビットの初期状態を準備
- ・左から順番に「量子ゲート」を演算する
 - ・量子ゲートはユニタリ行列 $UU^{\dagger} = U^{\dagger}U = I$
 - ・1qubit、または2qubitに作用するものが基本
- ・最後に「測定」して情報(計算結果)を得る



典型的な量子ゲート

$$|0\rangle = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, |1\rangle = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$
 の二つのベクトルで状態を表す

- 1 qubit ゲート
 - Xゲート (NOT ゲート)

$$X = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$$

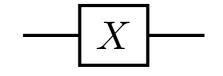


$$H = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix}$$

量子回路での記号

ビットを反転

$$X|0\rangle = |1\rangle$$
$$X|1\rangle = |0\rangle$$



重ね合わせ状態を生成

$$H|0\rangle = \frac{|0\rangle + |1\rangle}{\sqrt{2}}$$

$$H|1\rangle = \frac{|0\rangle - |1\rangle}{\sqrt{2}}$$

$$|\Psi\rangle = C_{00}|00\rangle + C_{01}|01\rangle + C_{10}|10\rangle + C_{11}|11\rangle = \begin{pmatrix} C_{00} \\ C_{01} \\ C_{10} \\ C_{11} \end{pmatrix}$$

典型的な量子ゲート

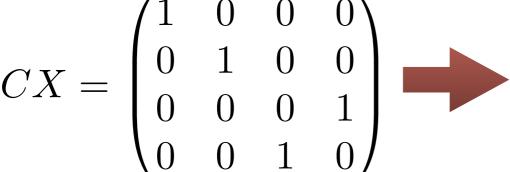
2-qubit ゲート

・ CX (Controlled-NOT) ゲート 1番目のビットに依存して

$$CX = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} \qquad CX|00\rangle = |00\rangle$$

$$CX|01\rangle = |01\rangle$$

$$CX|10\rangle = |11\rangle$$



CZ (Controlled-Z) ゲート

$$CZ = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & -1 \end{pmatrix} \longrightarrow CZ|00\rangle = |00\rangle$$

$$CZ|01\rangle = |01\rangle$$

$$CZ|10\rangle = |10\rangle$$

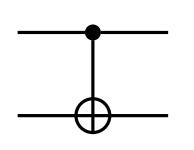
量子回路での記号

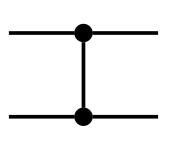
2番目のビットを反転
$$CX|00\rangle = |00\rangle$$
 $CX|01\rangle = |01\rangle$
 $CX|10\rangle = |11\rangle$
 $CX|11\rangle = |10\rangle$



$$CZ|00
angle = |00
angle$$

 $CZ|01
angle = |01
angle$
 $CZ|10
angle = |10
angle$
 $CZ|11
angle = -|11
angle$





量子回路における量子的な演算

・並列性

・ 量子的な重ね合わせ状態を入力すれば、最終状態は対応する出力の 重ね合わせになる

・分岐

• *H*ゲートなどにより、状態が"分岐"(|0>, |1>で見た場合)

・干渉

・ 重ね合わせの係数は、場合によってはキャンセルし、消える

・測定による収縮

測定した基底のいずれか一つの状態になる

量子アルゴリズム:

これらを組み合わせ、欲しい答えが高確率で実現するようにする

(補足)量子状態と確率

1 qubit状態:
$$|\psi\rangle = \alpha|0\rangle + \beta|1\rangle = \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix}$$

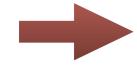


qubitが状態 |0⟩ にいるか |1⟩ にいるかを観測すると

*以降、量子状態は規格化されているとする

$$\langle \Psi | \Psi \rangle \equiv (\alpha^* \beta^*) \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} = \underline{|\alpha|^2 + |\beta|^2 = 1}$$

$$\mathcal{N}$$
-qubit状態: $|\Psi\rangle = \sum_{\{i_1,i_2,...i_N\}} \Psi_{i_1i_2...i_N} |i_1i_2...i_N\rangle$



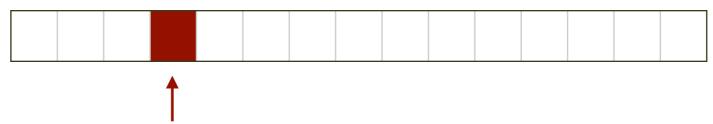
2^N種類の古典bit状態がそれぞれ確率的に観測される

演習で扱う量子アルゴリズム

Groverのアルゴリズム

Groverのアルゴリズム (L. K. Grover, 1996)

非構造化データの探索: N個のデータ中で特定の"アタリ"はどこ?



古典コンピュータ:

基本的には一つ一つ"箱"をチェックしていく $\sim O(N)$



量子コンピュータでのGrover のアルゴリズムを使うと、 $\sim O(\sqrt{N})$ の計算時間で探索可能

古典コンピュータ $\sim O(N)$



量子コンピュータ $\sim O(\sqrt{N})$

"2乗"の計算時間削減!

Quantum bit string comparator

Quantum bit string comparator

与えられた2つのビット列を比較し、それらの大小関係を判定

D. S. Oliveira and R. V. Ramos (2007)の量子アルゴリズム

ビット列: $a,b \rightarrow$ 量子状態とする: $|a\rangle,|b\rangle$

補助量子ビット: m+2 個

量子回路: $U \rightarrow 2$ 個の補助ビットに判定結果を与える

$$U|a\rangle|b\rangle|0\rangle^{\otimes m}|00\rangle = |a\rangle|b\rangle|\psi\rangle|xy\rangle$$

$$a > b$$
 $|xy\rangle = |10\rangle$

$$a = b$$
 $|xy\rangle = |00\rangle$

$$a < b \longrightarrow |xy\rangle = |01\rangle$$

Quantum bit string comparator

Quantum bit string comparator

例1:2ビットの比較

$$|a\rangle = |11\rangle, |b\rangle = |01\rangle \longrightarrow |xy\rangle = |10\rangle$$

$$|a\rangle = |11\rangle, |b\rangle = |11\rangle \longrightarrow |xy\rangle = |00\rangle$$

$$U|a\rangle|b\rangle|0\rangle^{\otimes m}|00\rangle = |a\rangle|b\rangle|\psi\rangle|xy\rangle$$

$$a > b$$
 $|xy\rangle = |10\rangle$

$$a = b$$
 $|xy\rangle = |00\rangle$

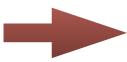
$$a < b \longrightarrow |xy\rangle = |01\rangle$$

例2:重ね合わせ状態

$$|a\rangle = |11\rangle, |b\rangle = \alpha|01\rangle + \beta|11\rangle$$

確率 $|\alpha|^2$ で a>b

確率 $|\beta|^2$ で a=b



$$|xy\rangle = \alpha |10\rangle + \beta |00\rangle$$

確率 $|\alpha|^2$ で $|10\rangle$

確率 $|\beta|^2$ で $|00\rangle$

量子的な重ね合わせ状態に対しては、判定結果も重ね合わせ状態になる

テンソルネットワークによるシミュレーション

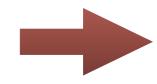
量子回路の古典シミュレーション

Schrödinger シミュレーション (State vector simulation)

量子回路を量子状態の時間発展とみなして計算する

n量子ビットの状態: 2^n 次元の複素数ベクトル

m量子ビットゲート: $2^m \times 2^m$ 次元の行列



量子ビット数に関して指数関数のコスト

テンソルネットワークシミュレーション

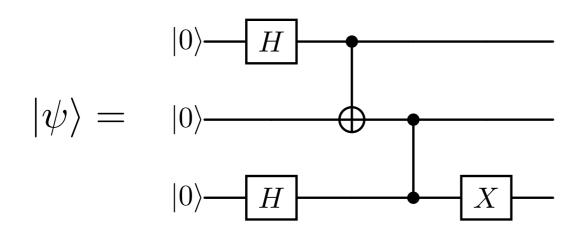
量子回路をテンソルネットワークとみなして計算

- ・縮約順序の工夫による計算量削減
- ・ 量子ゲート、量子"状態"のテンソル分解

Cf. Feynmann シミュレーション

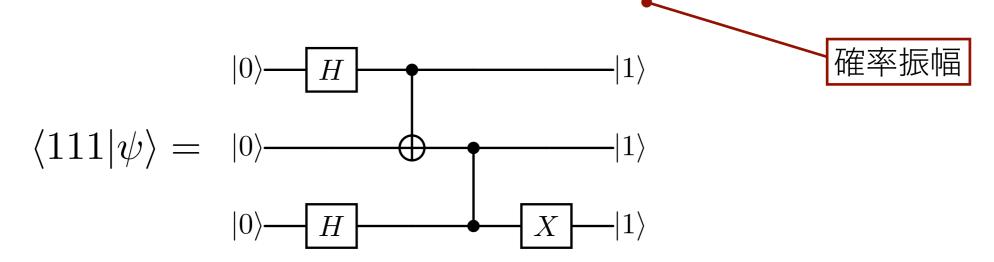
シミュレーションで求めたいもの

1. 量子回路の最終的な量子状態



2. 特定の状態を測定する確率

例: $|111\rangle$ を測定する確率 = $|\langle 111|\psi\rangle|^2$



シミュレーションで求めたいもの:密度行列

3. (縮約)密度行列

n量子ビット状態: $|\psi\rangle$

 $|i_1i_2\cdots i_n\rangle$ の観測確率

$$P(i_1, i_2, \cdots, i_n) = |\langle i_1 i_2 \cdots i_n | \psi \rangle|^2$$
$$= \langle i_1 i_2 \cdots i_n | \psi \rangle \langle \psi | i_1 i_2 \cdots i_n \rangle$$

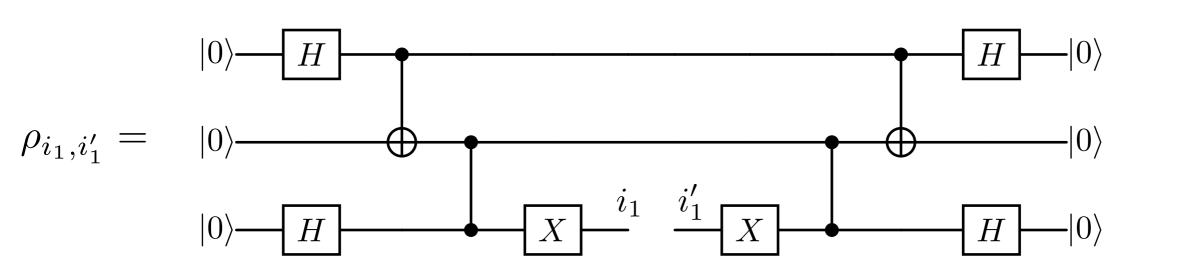
iıが観測される確率(周辺分布)

$$P(i_1) = \sum_{i_2, i_3, \dots, i_n = 0, 1} P(i_1, i_2, \dots, i_n)$$

この周辺分布は、縮約密度行列

$$\rho_{i_1,i_1'} = \sum_{i_2,i_3,\dots,i_n} \langle \mathbf{i_1} i_2 \cdots i_n | \psi \rangle \langle \psi | \mathbf{i_1'} i_2 \cdots i_n \rangle$$

の対角成分になっている



量子回路とテンソルネットワーク

ダイアグラムを用いたテンソル表記

・ベクトル

$$\vec{v}:v_i$$

行列

$$M:M_{i,j}$$

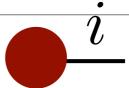
・テンソル

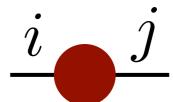
$$T:T_{i,j,k}$$

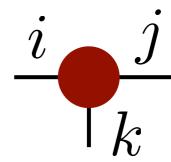
テンソルの積(縮約)の表現

$$C_{i,j} = (AB)_{i,j} = \sum_{k} A_{i,k} B_{k,j}$$

$$D_{i,j,k} = \sum_{\alpha,\beta,\gamma} A_{i,j,\alpha,\beta} B_{\beta,\gamma} C_{\gamma,k,\alpha}$$





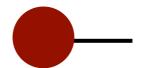


*n階のテンソル=n本の足

$$\frac{i}{k} = \frac{i}{k} \frac{k}{k}$$

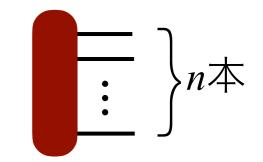
量子回路のテンソルネットワーク表現

1量子ビット状態:次元2のベクトル

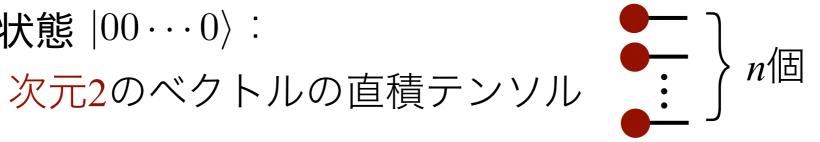


n量子ビット状態:次元 2^n のベクトル= $\underline{n$ 本足</u>のテンソル :

*各足の次元は2



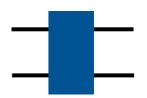
(通常の) 初期状態 |00…0>:



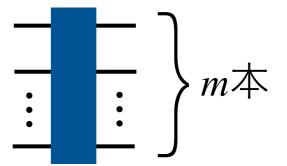
1量子ビットゲート: 2×2の行列



2量子ビットゲート: $2^n \times 2^n$ の行列= $2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2$ の4本足テンソル

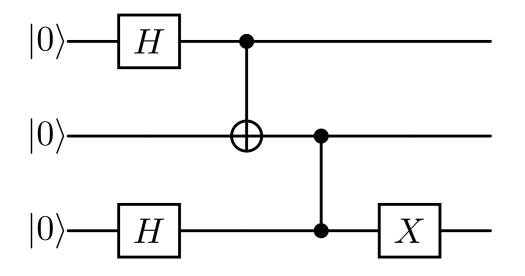


m量子ビットゲート:2m本足のテンソル

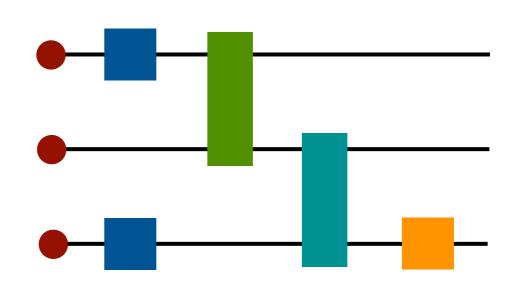


量子回路のテンソルネットワーク表現

量子回路

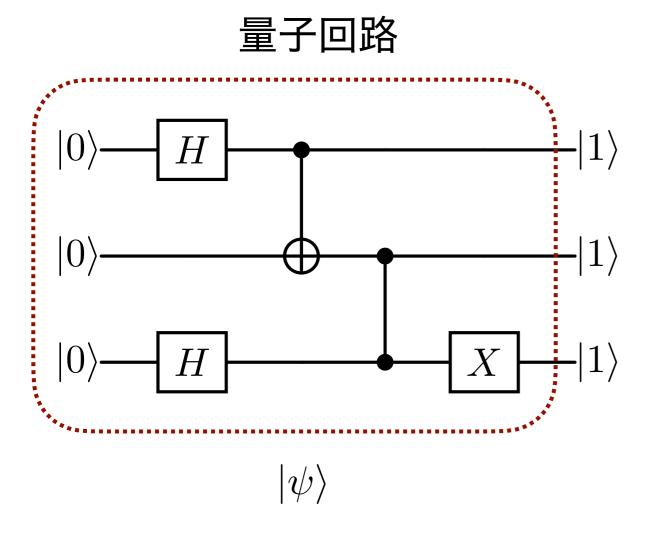


テンソルネットワーク表現

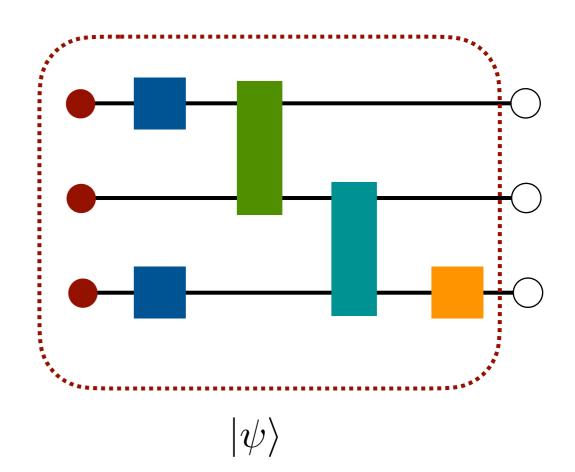


確率振幅とテンソルネットワーク

確率振幅: $\langle 111|\psi\rangle$



テンソルネットワーク表現

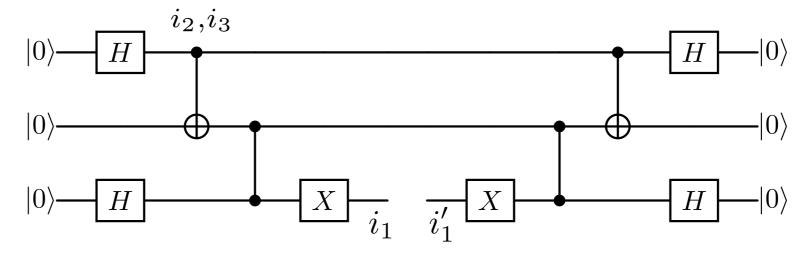


縮約密度行列とテンソルネットワーク

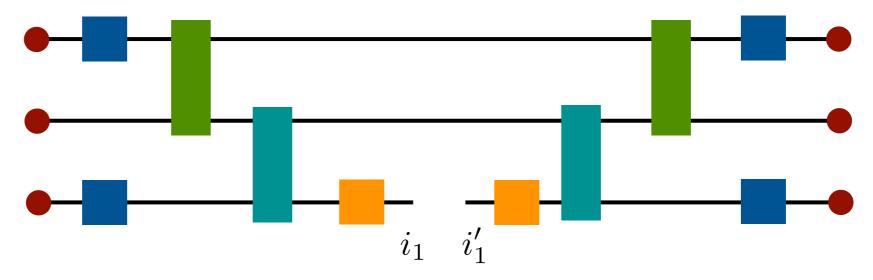
縮約密度行列

$$\rho_{i_1,i_1'} = \sum \langle i_1 i_2 i_3 | \psi \rangle \langle \psi | i_1' i_2 i_3 \rangle$$

量子回路



テンソルネットワーク表現



テンソルネットワーク表現のメリット?

- 縮約順序の工夫
- ・ 多量子ビットの効率的な表現

計算コストと縮約順序

縮約の計算量

行列積:
$$A, B = \chi \times \chi$$

$$C = AB$$
の計算量= $O(\chi^3)$

テンソル縮約:
$$A = \chi \times \chi$$
 $B = \chi \times \chi \times \chi$

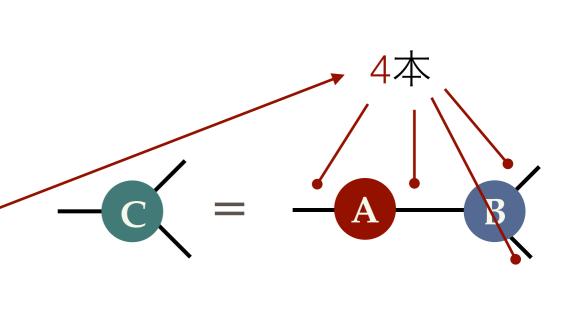
$$C = \sum_{\alpha} A_{:,\alpha} B_{\alpha,:,:}$$

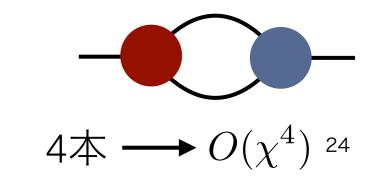
の計算量=
$$O(\chi^4)$$

ダイアグラムとの対応

縮約の計算量はダイアグラムの足の数で分かる

(メモリ使用量も分かる)





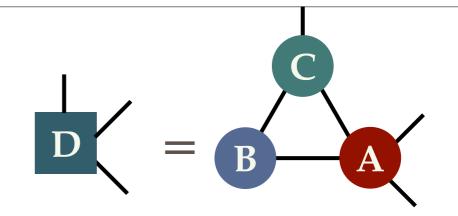
縮約の計算量と計算順

$$A = \chi \times \chi \times \chi \times \chi$$

テンソル縮約: $B = \chi \times \chi$

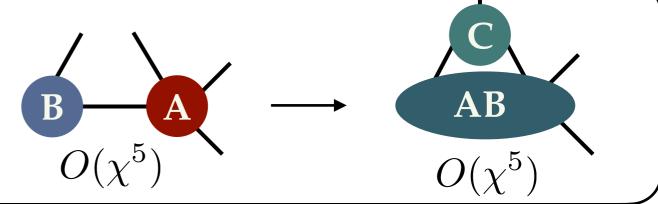
$$C = \chi \times \chi \times \chi$$

$$D = \sum_{\alpha,\beta,\gamma} A_{:,:,\alpha,\beta} B_{\beta,\gamma} C_{\gamma,:,\alpha}$$



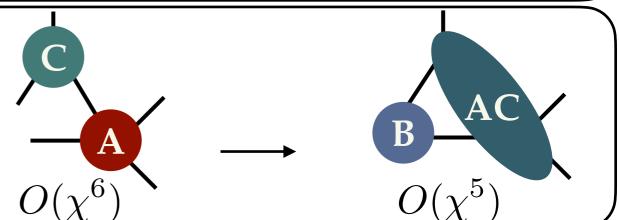
Case 1: D = (AB)C

の計算量= $O(\chi^5) + O(\chi^5)$



Case 2: D = (AC)B

の計算量= $O(\chi^6) + O(\chi^5)$



縮約の評価順で計算量が変わる!

*最適順序の決定はNP困難。実用的なアルゴリズム例

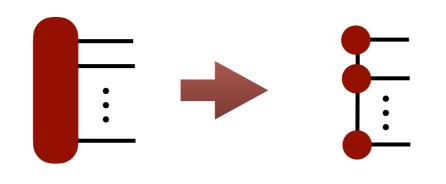
R.N.C. Pfeifer, et al., Phys. Rev. E **90**, 033315 (2014). 25

多量子ビットゲートの行列積分解

多量子ビットゲートのテンソルネットワーク表現

行列積分解: テンソルを小さいテンソルの一次元的なつながりで表現

n量子ビット状態

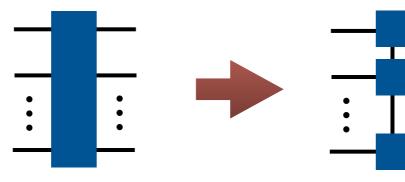


行列積状態
(Matrix Product State)
*各テンソルをつなぐ足の次元
=ボンド次元 χ

独立要素の数: 2^n

 $\sim 2n\chi^2$

n量子ビットゲート



行列積演算子 (Matrix Product Operator)

独立要素の数: 2

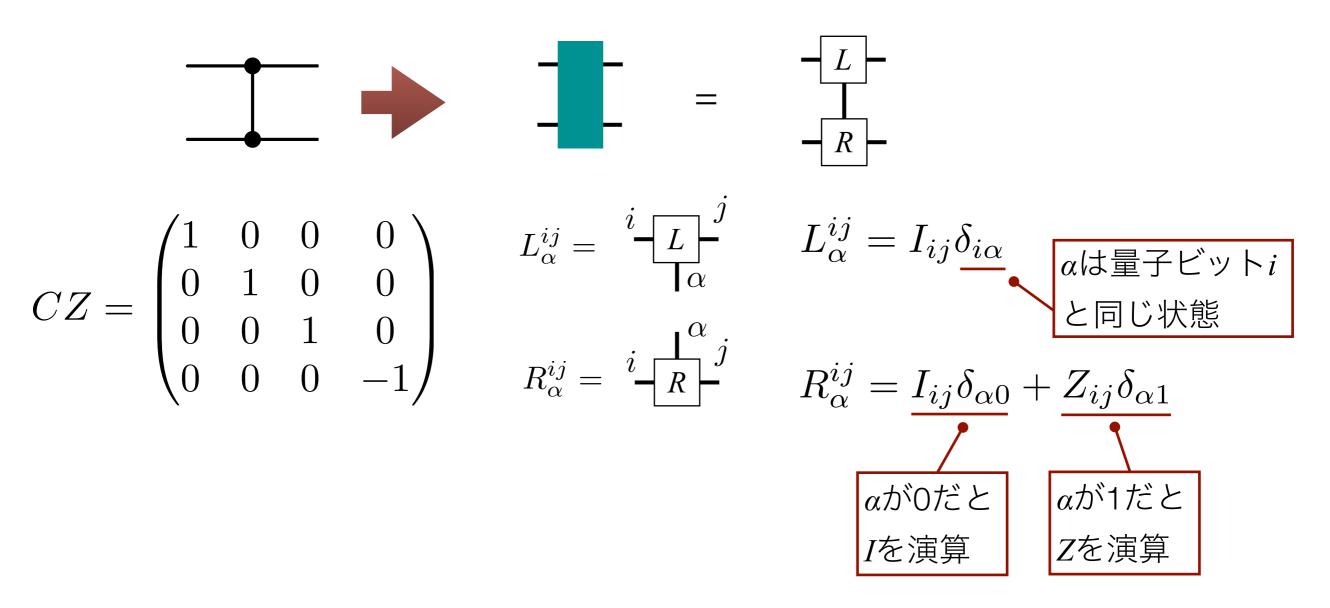
 2^{2n}

 $\sim 4n\chi^2$

行列積分解はχが小さいと効率的に状態・ゲートを表現できる!

CZゲートの行列積分解

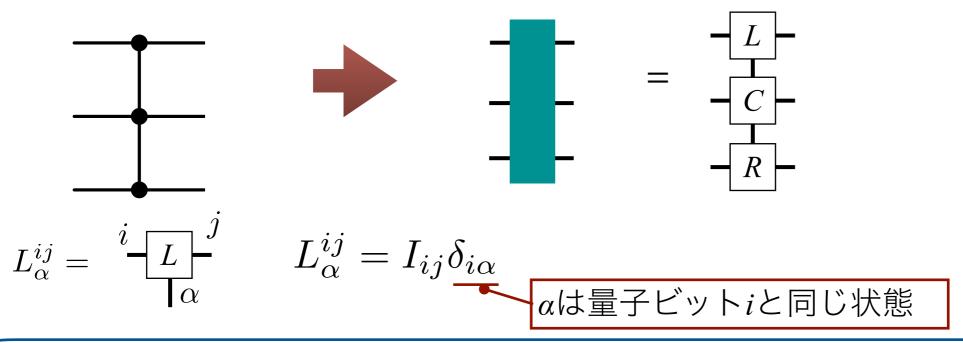
 $CZゲートはボンド次元<math>\chi=2$ の行列積分解が可能



二つのテンソルをつなぐindex αで、上の量子ビットの情報を運ぶ

3qubit CZゲートの行列積分解

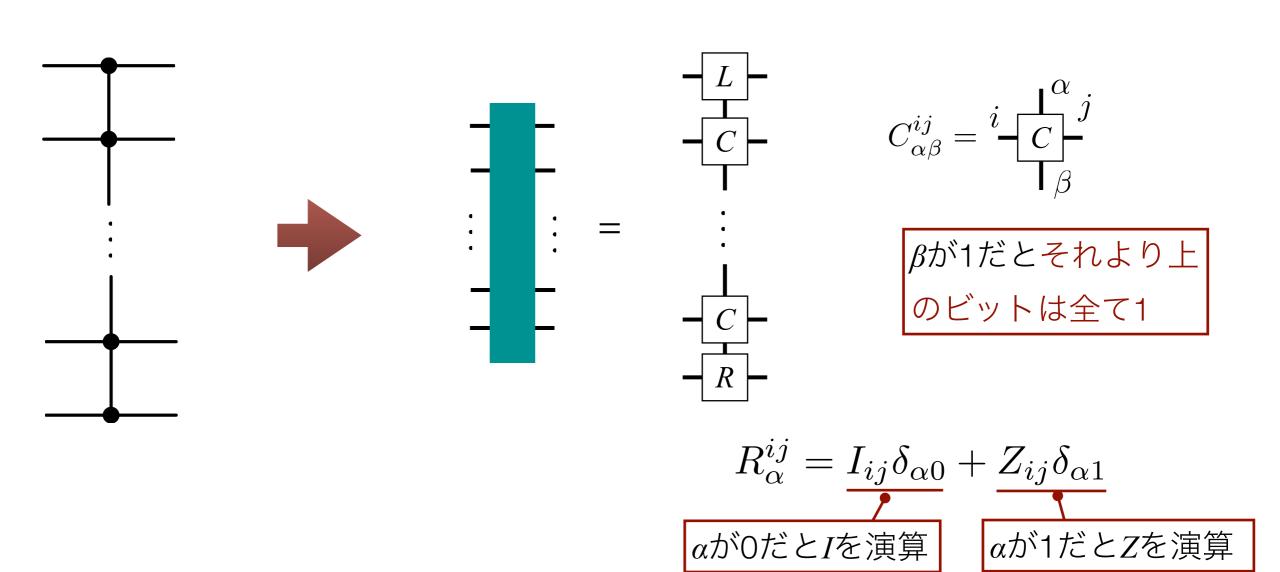
3qubit CZゲートもボンド次元 $\chi=2$ の行列積分解が可能



$$R_{\alpha}^{ij} = i$$
 $R_{\alpha}^{ij} = I_{ij}\delta_{\alpha 0} + Z_{ij}\delta_{\alpha 1}$ α が0だと I を演算 α が1だと Z を演算

n qubit CZゲートの行列積分解

n qubit CZゲートはこれまでのL, C, Rを使って χ =2の行列積分解が可能



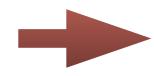


 2^{2n} の情報が $\sim 4n\chi^2 = 16n$ の独立成分に圧縮できた!

量子状態のサンプリング

量子ビットの逐次サンプリング

 $|i_1i_2\cdots i_n\rangle$ の観測確率 $P(i_1,i_2,\cdots,i_n)$



$$P(i_1, i_2, \dots, i_n) = P(i_1)P(i_2, i_3, \dots, i_n|i_1)$$

周辺分布 inが決まった時の条件付き確率

右辺の式を使って状 態をサンプリング

まず周辺分布でi₁をサンプリングした後に、 残りの量子ビットを条件付き確率で決める

*確率分布に従って状態を生成



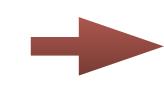
条件付き確率も同様に分解

$$P(i_1, i_2, \dots, i_n) = P(i_1)P(i_2, i_3, \dots, i_n|i_1)$$

$$= P(i_1)P(i_2|i_1)P(i_3, i_4, \dots, i_n|i_1, i_2)$$

$$= P(i_1)P(i_2|i_1)P(i_3|i_1, i_2)P(i_4, i_5, \dots, i_n|i_1, i_2, i_3)$$

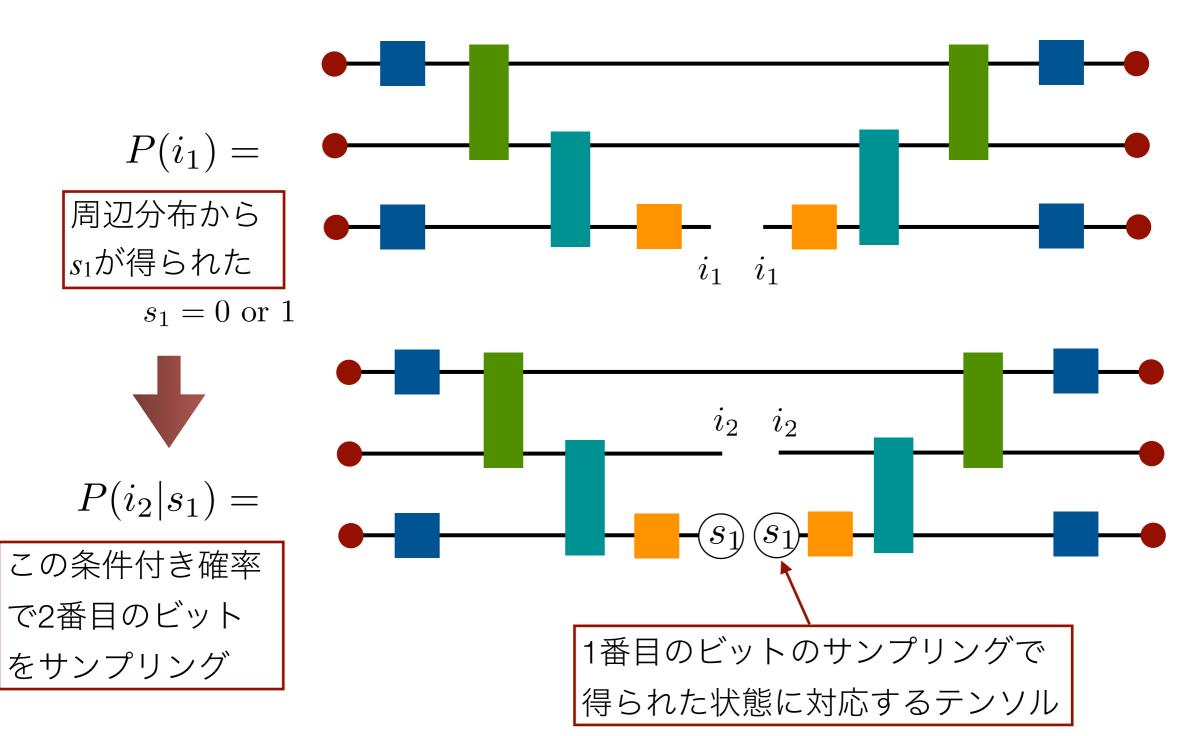
この分解により量子ビットを一つずつ 順番にサンプリングすることが可能



TNの縮約で計算コスト を下げられる可能性

量子ビットの逐次サンプリング例:3量子ビット

 $P(i_1, i_2, i_3) = P(i_1)P(i_2|i_1)P(i_3|i_1, i_2)$



まとめ

- ・ 量子計算の概要
 - ・ 典型的な量子ゲートを復習
 - ・ 演習で扱う量子アルゴリズム→Grover & Quantum bit string comparator
- ・ テンソルネットワークによるシミュレーション
 - ・ 量子回路はテンソルネットワークに変換可能
 - ・ 量子状態、確率振幅、縮約密度行列のTNダイアグラム
 - ・ テンソルネットワークの計算コストは縮約順序に依存
 - ・ 多量子ビットゲートを行列積分解にすることでコストが下がる場合がある
 - ・ 量子状態のサンプリングもテンソルネットワーク表現により低コストでできる可能性